

# 第 16 期 中 間 決 算 公 告

2015年12月25日

大阪市中央区備後町二丁目2番1号  
株式会社 近畿大阪銀行  
代表取締役社長 中 前 公 志

## 中 間 貸 借 対 照 表 (2015年9月30日現在)

(単位：百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
( 資 産 の 部 )		( 負 債 の 部 )	
現 金 預 け 金	406,484	預 金	3,257,795
買 入 金 銭 債 権	18,099	譲 渡 性 預 金	87,600
有 価 証 券	673,586	借 用 金	90,000
貸 出 金	2,467,337	外 国 為 替	45
外 国 為 替	3,811	そ の 他 負 債	14,892
そ の 他 資 産	8,987	未 払 法 人 税 等	436
そ の 他 の 資 産	8,987	リ ー ス 債 務	873
有 形 固 定 資 産	30,284	資 産 除 去 債 務	162
無 形 固 定 資 産	335	そ の 他 の 負 債	13,420
前 払 年 金 費 用	3,978	賞 与 引 当 金	1,390
支 払 承 諾 見 返	11,484	退 職 給 付 引 当 金	4,800
貸 倒 引 当 金	△ 19,675	そ の 他 の 引 当 金	5,254
		繰 延 税 金 負 債	2,878
		支 払 承 諾	11,484
		負 債 の 部 合 計	3,476,141
		( 純 資 産 の 部 )	
		資 本 金	38,971
		資 本 剰 余 金	55,439
		資 本 準 備 金	38,971
		そ の 他 資 本 剰 余 金	16,467
		利 益 剰 余 金	23,287
		そ の 他 利 益 剰 余 金	23,287
		繰 越 利 益 剰 余 金	23,287
		株 主 資 本 合 計	117,697
		そ の 他 有 価 証 券 評 価 差 額 金	10,873
		評 価 ・ 換 算 差 額 等 合 計	10,873
		純 資 産 の 部 合 計	128,571
資 産 の 部 合 計	3,604,713	負 債 及 び 純 資 産 の 部 合 計	3,604,713

中間損益計算書 ( 2015年4月1日から )  
( 2015年9月30日まで )

(単位：百万円)

科 目	金	額
経 常 収 益		35,946
資 金 運 用 収 益	19,887	
(うち貸出金利息)	( 17,502 )	
(うち有価証券利息配当金)	( 2,164 )	
役 務 取 引 等 収 益	8,211	
そ の 他 業 務 収 益	2,088	
そ の 他 経 常 収 益	5,758	
経 常 費 用		26,109
資 金 調 達 費 用	1,180	
(うち預金利息)	( 986 )	
役 務 取 引 等 費 用	3,326	
営 業 経 費	19,447	
そ の 他 経 常 費 用	2,154	
経 常 利 益		9,836
特 別 利 益		0
特 別 損 失		95
税 引 前 中 間 純 利 益		9,740
法人税、住民税及び事業税	932	
法 人 税 等 調 整 額	794	
法 人 税 等 合 計		1,726
中 間 純 利 益		8,013

記載金額は百万円未満を切り捨てて表示しております。

## 重要な会計方針

1. 商品有価証券の評価基準及び評価方法  
商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。
2. 有価証券の評価基準及び評価方法  
有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、子会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券のうち株式については中間決算日前1ヵ月の市場価格の平均に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、それ以外については中間決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。  
なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。
3. デリバティブ取引の評価基準及び評価方法  
デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
4. 固定資産の減価償却の方法
  - (1) 有形固定資産(リース資産を除く)  
有形固定資産は、定率法(ただし、1998年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))については定額法を採用し、年間減価償却費見積額を期間により按分し計上しております。  
また、主な耐用年数は次のとおりであります。  
建 物 6年～50年  
その他 2年～20年
  - (2) 無形固定資産(リース資産を除く)  
無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。
  - (3) リース資産  
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。
5. 引当金の計上基準
  - (1) 貸倒引当金  
貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。  
破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下、「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下、「実質破綻先」という。)に係る債権については、下記直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。  
また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者及び貸出条件緩和債権等を有する債務者で与信額が一定額以上の大口債務者のうち、債権の元本の回収及び利息の受取りに係るキャッシュ・フローを合理的に見積もることができる債権については、当該キャッシュ・フローを貸出条件緩和実施前の約定利子率で割引いた金額と債権の帳簿価額との差額を貸倒引当金とする方法(キャッシュ・フロー見積法)により計上しております。  
上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。  
すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。  
なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は 14,973 百万円であります。
  - (2) 賞与引当金  
賞与引当金は、従業員への業績インセンティブ給与の支払いに備えるため、従業員に対する業績インセンティブ給与の支給見込額のうち、当中間期に帰属する額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、当中間期末において発生していると認められる額を計上しております。また、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当中間期末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。なお、過去勤務費用及び数理計算上の差異の処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用	発生年度に一括して損益処理
数理計算上の差異	各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌期から損益処理

(4) その他の引当金

その他の引当金は、将来発生が見込まれる費用又は損失について合理的に見積もることができる金額を計上しております。主な内訳は次のとおりであります。

預金払戻損失引当金 3,475百万円

負債計上を中止した預金について、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積もり、計上しております。

信用保証協会負担金引当金 1,167百万円

信用保証協会の責任共有制度導入等に伴い、将来、負担金として発生する可能性のある費用を見積もり、計上しております。

6. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建資産及び負債は、中間決算日の為替相場による円換算額を付しております。

7. 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

8. 連結納税制度の適用

株式会社りそなホールディングスを連結納税親会社とする連結納税主体の連結納税子会社として、連結納税制度を適用しております。

## 会計方針の変更

(「企業結合に関する会計基準」等の適用)

「企業結合に関する会計基準」(企業会計基準第21号 2013年9月13日。以下、「企業結合会計基準」という。)、及び「事業分離等に関する会計基準」(企業会計基準第7号 2013年9月13日。以下「事業分離等会計基準」という。)等を、当中間期から適用し、取得関連費用を発生した事業年度の費用として計上する方法に変更しております。また、当中間期の期首以後実施される企業結合については、暫定的な会計処理の確定による取得原価の配分額の見直しを企業結合日の属する中間会計期間の中間財務諸表に反映させる方法に変更いたします。

企業結合会計基準等の適用については、企業結合会計基準第58-2項(4)及び事業分離等会計基準第57-4項(4)に定める経過的な取扱いに従っており、当中間期の期首時点から将来にわたって適用しております。

なお、当中間期において、中間財務諸表に与える影響額はありません。

## 注記事項

### (中間貸借対照表関係)

1. 関係会社の株式総額 2,216 百万円
2. 貸出金のうち、破綻先債権額は 592 百万円、延滞債権額は 61,021 百万円であります。  
なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(1965 年政令第 97 号)第 96 条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。  
また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。
3. 貸出金のうち、3ヵ月以上延滞債権額は 484 百万円であります。  
なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。
4. 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は 9,894 百万円であります。  
なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び 3 ヶ月以上延滞債権に該当しないものであります。
5. 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は 71,993 百万円であります。  
なお、上記 2.から 5.に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。
6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第 24 号)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は 22,129 百万円であります。
7. 担保に供している資産は次のとおりであります。

担保に供している資産	
有価証券	49,248 百万円
貸出金	112,847 百万円
担保資産に対応する債務	
預金	11,659 百万円
借入金	65,000 百万円

上記のほか、為替決済、デリバティブ取引等の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、現金預け金 2,000 百万円、有価証券 19,885 百万円及びその他資産 41 百万円を差し入れております。  
また、その他の資産には、敷金保証金 1,071 百万円が含まれております。
8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は 367,315 百万円あります。このうち原契約期間が1年以内のもの(又は任意の時期に無条件で取消可能なもの)が 357,828 百万円あります。  
なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている社内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。
9. 有形固定資産の減価償却累計額 20,985 百万円
10. 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付けられた劣後特約付借入金 25,000 百万円が含まれております。
11. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する当社の保証債務の額は 16,241 百万円あります。
12. 銀行法施行規則第 19 条の 2 第 1 項第 3 号ロ(10)に規定する単体自己資本比率(国内基準)は 10.36%であります。

### (中間損益計算書関係)

1. その他経常収益には、貸倒引当金戻入益 2,023 百万円、償却債権取立益 663 百万円及び株式等売却益 156 百万円を含んでおります。
2. その他経常費用には、貸出金償却 348 百万円、株式等売却損 8 百万円及び株式等償却 3 百万円を含んでおります。
3. 特別損失には、減損損失 79 百万円を含んでおります。

(有価証券関係)

中間貸借対照表の「有価証券」のほか、「現金預け金」中の譲渡性預け金及び「買入金銭債権」中の信託受益権が含まれております。

1. 満期保有目的の債券(2015年9月30日現在)

	種類	中間貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が中間貸借対照表計上額 を超えるもの	国債	148,466	153,799	5,333
	社債	15,411	15,570	159
	小計	163,877	169,370	5,492
時価が中間貸借対照表計上額 を超えないもの	社債	830	818	△11
合計		164,707	170,188	5,481

2. 子会社・子法人等株式及び関連法人等株式(2015年9月30日現在)

時価のあるものはありません。

なお、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社・子法人等株式及び関連法人等株式は、次のとおりであります。

	中間貸借対照表計上額 (百万円)
子会社・子法人等株式	2,216

3. その他有価証券(2015年9月30日現在)

	種類	中間貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
中間貸借対照表計上額が取得 原価を超えるもの	株式	13,012	4,048	8,963
	債券	418,809	416,548	2,260
	国債	84,093	83,680	412
	地方債	38,705	38,530	174
	社債	296,010	294,336	1,673
	その他	51,221	46,345	4,876
	小計	483,043	466,942	16,100
中間貸借対照表計上額が取得 原価を超えないもの	株式	257	305	△48
	債券	28,541	28,564	△23
	地方債	1,696	1,698	△2
	社債	26,844	26,865	△21
	その他	30,794	31,231	△436
	小計	59,593	60,101	△508
合計		542,636	527,044	15,592

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められるその他有価証券

	中間貸借対照表計上額 (百万円)
株式	1,970
その他	158
合計	2,128

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含まれておりません。

(税効果会計関係)

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳は、それぞれ次のとおりであります。

繰延税金資産		
貸倒引当金損金算入限度超過額	9,421	百万円
有価証券償却否認額	3,943	
税務上の繰越欠損金	3,848	
固定資産減損損失	3,621	
退職給付引当金	1,548	
その他	3,565	
繰延税金資産小計	25,949	
評価性引当額	△22,776	
繰延税金資産合計	3,173	
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△4,718	
前払年金費用	△1,219	
未収配当金	△47	
その他	△66	
繰延税金負債合計	△6,051	
繰延税金負債の純額	2,878	百万円

(1株当たり情報)

1株当たりの純資産額	70円36銭
1株当たりの中間純利益金額	4円38銭